

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530766

研究課題名(和文) 母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人的問題行動の予防に及ぼす効果

研究課題名(英文) Women's optimistic attributional style prevents the interpersonal problem behaviors of their children

研究代表者

沢宮 容子 (SAWAMIYA, Yoko)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：60310215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人的問題行動の予防に及ぼす効果について検討することであった。幼稚園および保育所の園児とその母親を主たる対象に研究を行った結果、母親の対人的楽観性と幼児の対人的問題行動との間には負の相関があり、母親の対人的楽観性は幼児の対人的問題行動に負の影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、母親の対人的楽観性の変容は幼児の対人的問題行動の予防に一定の効果を示唆された。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to examine the influence of the transformation of a mother's optimistic attributional style on the prevention of the interpersonal problem behaviors of her children. This study was conducted involving preschool children attending nursery/kindergarten and their mothers. The results indicate that there is a negative correlation between a mother's optimistic attributional style and the interpersonal problem behaviors of her children, and that the former has a negative influence on the latter. Furthermore, it was suggested that the transformation of a mother's optimistic attributional style has some influence on the prevention of the interpersonal problem behaviors of her children.

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：楽観性 ポジティブ心理学 認知行動療法

1. 研究開始当初の背景

本研究で取り上げる楽観性という概念については、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) が、無力感の予防策として楽観的な期待の必要性を論じたことに端を発し、その負の側面も含め数々の実証的な研究がなされてきた (Affleck, Allen, McGrade, & McQueeney, 1982; Manly, McMahon, Bradley, & Davidson, 1992; 増田, 1994; 坂野・戸ヶ崎, 1993; Seligman, 1991; 藤南・園田・詫摩, 1993; 戸ヶ崎・坂野, 1993 など)。Seligman & Csikszentmihalyi (2000) が「心理学は人間のより積極的な側面に注目すべきである」と提唱したことで知られるポジティブ心理学においても、楽観性は重要な概念となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人的問題行動の予防に及ぼす効果について検討することであった。

3. 研究の方法

(1) 母親の対人的楽観性が幼児の対人的問題行動にどう影響するかについて検討を行った。具体的には、性別、月齢、発達程度などは同じだが、一方は母親の対人的楽観性が高い幼児の群、他方は母親の対人的楽観性が低い幼児の群の2群を抽出し、各群の幼児の発達プロセスを、ビデオ録画や自然観察の分析などによって比較し、母親の対人的楽観性が幼児の対人的問題行動に及ぼす影響について検討を行った。

また、対象児の母親に対する個別面接も実施した。

(2) (1)の結果を踏まえ、母親の対人的楽観性が幼児の対人的問題行動の改善に及ぼす影響について検討を行った。具体的には、「社会的スキル欠如型の引っ込み思案児」を、楽観性の高い母親をもつ群と低

い母親をもつ群に分け、各群の幼児に対し社会的スキル訓練を行った場合の効果、ビデオ録画の分析など、縦断研究によって比較、検討を行った。

さらに、対象児の母親に対する個別面接も継続して実施した。

(3) (2)の結果を踏まえ、母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人的問題行動の改善に及ぼす効果について検討を行った。具体的には、「社会的スキル欠如型の引っ込み思案児」を対象とした社会的スキル訓練と並行して、楽観性の低い母親には対人的楽観性の変容を行い、幼児の対人的問題行動の改善にいかなる効果を及ぼすかを検討した。

なお、対人的楽観性の変容にあたっては、Seligman (1991), McMullin & Giles (1981), および Ellis (1973) を参考に作成したプログラムを適用した。

4. 研究成果

母親の対人的楽観性と幼児の対人的問題行動の間には負の相関があり、母親の対人的楽観性は幼児の対人的問題行動に負の影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、母親の対人的楽観性の変容は幼児の対人的問題行動の予防に一定の効果を及ぼすことが示唆された。

また、対人的問題行動に対しては楽観性等のポジティブな側面に焦点を当てながら予防的援助を行うことが重要であることが示唆された。

なお、一連の研究成果については、「日本カウンセリング学会記念賞 独創研究内山喜久雄記念賞」を受賞するなど、学会で高い評価を得ている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計11件)

沢宮容子 児童の抑うつに及ぼす REBT 心理教育の効果の検討 REBT 研究, 3, 67-75, 2013. 査読有

有富公教・外山美樹・沢宮容子 セルフトークが運動パフォーマンスに及ぼす影響 スポーツ心理学研究, 40, 153-163, 2013. 査読有

浦上涼子・小島弥生・沢宮容子 青年における瘦身理想の内在化と瘦身願望との関係についての検討 教育心理学研究, 61, 146-157, 2013. 査読有

沢宮容子 うつ状態に対する認知行動療法 更年期と加齢のヘルスケア, 12, 133-135, 2013. 査読無

岡本翔平・奥野誠一・沢宮容子 考え込み型反応スタイルと問題解決能力との関連 山形大学心理教育相談室紀要, 11, 27-34, 2013. 査読無

栄藤典子・奥野誠一・沢宮容子 シャイネスと自己愛傾向が心理的 well-being に及ぼす影響 山形大学心理教育相談室紀要, 11, 21-26, 2013. 査読無

沢宮容子 しなやかな楽観性で子どもの力を引き出す ポジティブ心理学の教育での活用 児童心理, 67, 10 月号, 59-65, 2013. 査読無

沢宮容子 楽観的帰属様式と自己の性格特性評価との関連 応用心理学研究, 38, 149-150, 2012. 査読有

西田恵理子・奥野誠一・沢宮容子 青年期の友人関係における『自己表明と『他者表明を望む気持ちがライフイベントにおよぼす影響 心理臨床学研究, 28, 687-692, 2010. 査読有

沢宮容子・田上不二夫 不眠を訴える女性への認知行動療法の適用 カウンセリング研究, 43, 287-295, 2010. 査読有

海部紀行・沢宮容子・楡木満生・井田政則 不合理的信念と自己意識が主張行動に及ぼす影響 産業カウンセリング研究,

12, 1-10, 2010. 査読有

〔学会発表〕(計1件)

沢宮容子 エビデンスに基づくカウンセリングと認知行動療法 日本カウンセリング学会「独創研究 内山喜久雄記念賞」受賞者講演, 2010年9月4日, 文教大学.

〔図書〕(計12件)

沢宮容子 認知行動療法における見立てと介入をつなぐ工夫 乾 吉佑(編), 心理療法の見立てと介入をつなぐ工夫, 金剛出版, 224頁(61-71), 2013.

沢宮容子 認知行動療法 菅沼憲治・日本人生哲学感情心理学会(編) 人生哲学感情心理療法入門 アルバート・エリス博士の REBT を学ぶ 静岡学術出版, 214頁(190-196), 2013.

沢宮容子 無気力 小林朋子・徳田克己(編著) ここだけは押さえたい学校臨床心理学, 文化書房博文社, 219頁(92-101), 2012.

沢宮容子 楽観的帰属様式の臨床心理学的研究, 風間書房, 198頁, 2012.

沢宮容子 論理情動行動療法(REBT) 楡木満生・田上不二夫(編), カウンセリング心理学ハンドブック上巻, 金子書房, 331頁(208-216), 2011.

沢宮容子 認知行動カウンセリング 松原達哉(編集代表), 沢宮容子他(編著), カウンセリング実践ハンドブック, 丸善, 704頁(28-31), 2011.

沢宮容子 人間関係と心の問題 徳田克己・福島洋子(編著) ヒューマンサービスに関わる人のための心の健康学, 文化書房博文社, 201頁(163-182), 2011.

内山喜久雄・沢宮容子・中井貴美子・松田英子, 認知行動療法の理論と臨床, ぎょうせい, 180頁(12-25, 92-126), 2010.

沢宮容子 選択性緘黙 田上不二夫（編著），実践グループカウンセリング，金子書房，239 頁（127-136），2010.

沢宮容子 認知行動療法 菅沼憲治（編），REBT カウンセリング，ぎょうせい，204 頁（183-191），2010.

沢宮容子 認知変容の技法 榎木満生（編），クライアントの問題を解決する面接技法，ぎょうせい，204 頁（48-57），2010.

沢宮容子 人間関係の病理 徳田克己（編著），ヒューマンサービスに関わる人のための改訂人間関係学，文化書房博文社，198 頁（29-47），2010.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

沢宮 容子 (SAWAMIYA, Yoko)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：60310215

(2) 研究分担者

なし